

## 「遊び DAY」の成果と今後の課題

島内 智秋、今 和香子、蝦名 敦子

---

### 1 はじめに

2025年10月4日（土）と5日（日）の二日間にわたって、「遊び DAY」が柴田学園大学短期大学部において開催された。この実践を企画するにあたって、最初は今和香子と蝦名敦子との何げない会話から始まった。模擬保育などが本学部では実施されるが、本当にその場に子どもたちがいたら理想的なことや、教育実習とは別に純粋に遊ぶだけの日があったら面白いのではないか等、会話がはずみ、そこから「遊び DAY」という言葉が今の発案によって生まれた。実現の可能性があるのかどうか定かではなかったが、そのようなワークショップがあったら面白い、と蝦名も賛同し、今は運動遊びを、蝦名は造形遊びと一緒にできるワークショップが考案されたのである。企画書を作成し、まずは学長先生にご相談し、賛同を得られたことから「遊び DAY」は動き出し、実施の運びになった。本活動報告はその「遊び DAY」に関してである。運動遊びの内容については今が、造形遊びの内容については蝦名が担当した。

#### 1-1 「遊び DAY」の趣旨と目的

「遊び DAY」を開催するにあたって、趣旨を以下のように設定した。

趣旨：本学の施設を使って、運動遊びと造形遊びを、幼児を対象に行う。運動遊びは「健康の指導法」の今が、造形遊びは「環境の指導法」の蝦名が担当する。希望する学生がファシリテーターとなり、学生と保護者、子どもと一緒にを行うワークショップ型の活動である。そのためには、子どもにとって自由に遊ぶことができる空間、環境を用意し、また学生にとっても実習とは異なった幼児との触れ合いができる場を提供する。保護者のみならず、園ごとの参加も可能にする。

以上から次の3点の具体的な目的が定まった。

- ① 個別に行われる5領域の指導法の授業連携を図る（今回は「健康の指導法」と「環境の指導法」）。
- ② 学生が「健康」と「環境」の授業で学んだ内容を、実際に幼児を対象として実践的に活かす場の提供。
- ③ 本学と、地域の保育園や幼稚園等の連携を図り、幼児が自由に遊ぶことのできる環境を提供する。

尚、背景には、蝦名の科学研究費による研究課題「子供の空間把握に関する研究—環境と造形空間に焦点を当てて—」もあり、その費用を充てることができた。蝦名はその研究に関連させて、子どもの行為と空間との関わりで、特に「造形空間」に注目する。運動により子どもが認識する周囲の場所や空間と、何かを作りながら意識する「造形空間」との違いについて対比的に検討しようとする。従って、実施場所は重要であり、柴田学園大学短期大学部の体育館（運動遊び）や、中庭とカフェテリア（造形遊び）を想定した。尚、中庭では、図画工作表現（2年）で製作した動物をセットして、幼児に好まれる環境を準備し、そこで紙を丸めた棒を使った造形遊び（1年と2年実施済み）を行う、というものである。

## 2 「遊び DAY」の計画と内容

具体的に以下のように「遊び DAY」の計画がなされた。

日時は 2025 年 10/4 (土)～10/5 (日) の 2 日間で、午前、午後と 2 部構成で、運動遊びと造形遊びのいずれもできるようにする。参加者は、本短期大学部に足を運ぶことができる保護者と幼児が対象となる。そのためには、短大の実習生がお世話になっている保育園や幼稚園にフライヤー (図 1) を配り、保護者が引率して参加できる事前の申し込み制とする。また、バス等で送迎が可能な場合は、園でのまとまった参加も可能とした。

教員の興味・関心や、教師間の連携が次第に強まることによって、教育実習とは異なった、学生のより自由な子どもとの触れ合いを可能にする場を創り出し、またそれにより、教師の研究も深まるような総合的な場を創出することが期待された。

### 2-1 運動遊び

運動遊びでは、子どもが自然に活動したくなるような環境設定を大事にする。どのような環境にするかについて最初に検討がなされた。体育館に入っただけで何かしたくなる、身体を動かすような環境を用意し、それを短大生がサポートし、一緒に遊ぶような場の設定である。

幼児期の運動遊びは、心身の発達を促すだけでなく、仲間との関わりや自己の調整力など、社会性の基盤を育む重要な活動である。また、小学校体育科における「体づくりの運動遊び」「走・跳の運動遊び」などとの接続を考えると、就学前に多様な動きを経験することは、幼小連携の観点からも意義が大きい。本活動の目的は以下の 3 点である。

- 1) 幼児期の運動あそびの意義を理解し、多様な動きを経験する機会を提供すること。
- 2) 小学校低学年の体育科内容との接続を意識した活動を構成すること。
- 3) 学生 (保育科養成課程) が、子ども理解・援助方法・保護者対応を学ぶ機会とすること。

### 2-2 造形遊び

小学校でこれまで実施してきた丸棒を使った造形遊び「つなげて、つなげて」を題材にする。これまでの研究から、次のことが判明している。時間が 45 分 (約 1 時間) で、丸棒を作ってつなげるという活動をする、立体を作り出すのは幼児期からで、幼児においては途中の形からイメージが湧き、見立てながら形を作っていく傾向がある。本材料を使って自分の体が入る程の造形空間をつくりだすのは、小学校中学年 (3・4 年生) から、高学年にかけてバランスのとれた堅牢な形から、6 年生になると、さらにアンバランスの形をつくり、全体のバランスを図りながら「造形空間」を創り出すようになる。この「造形空間」把握の能力が、子どもの発達段階に応じて系統的に見られるのである。

翻って幼児期は、作ったもので遊ぶなどの自らの行為を通して「造形空間」というよりも、「場所の空間」を感じていると言えよう。本ワークショップでは、運動遊びと比較して体全体の動きと周囲の空間との関わりについて、その違いを検討しようとする。つまり、造形遊びと運動遊びによる「場所の空間」の感じ取り方の違いに注視することになる。

中庭に関しては、「環境」の授業を通して、中庭を整備してきた。その庭に幼児を解放すると、子どもたちがどのような活動をするのだろうか。セットした造形物とどのように関わるのか。事前に中庭に、授業で 2 年生が廃材を使って製作した動物を設置する (図 4 造形遊び左側)。また、学生が棒を繋いだ形を作って設置し、遊具の代わりに子どもたちがくぐり抜けて遊ぶことができるようにする。



(図1) 福井晶乃華さんのデザインによるフライヤー

<時間設定>

9:00~集合、準備

9:30~午前の部

10:00~11:30 「遊びDAY」

11:30~12:30 (昼食、休憩)

12:30~午後の部受付

13:00~14:30 「遊びDAY」

14:30~15:00 後片付け

スタッフの学生は予め、運動遊びと造形遊び、受付などに分けて担当を決めた。

(図2) 時間設定

運動遊び (体育館)	造形遊び (カフェテリア)
 	<p>造形遊びの環境構成 (カフェテリア: 集合、昼食、雨天の場合)</p> 

(図3) 運動遊びと造形遊びの場所の環境設定

### 3 「遊び DAY」を実施して

図 1 のフライヤーを用意し、事前に配布して当日は図 2 の時間配分で実施された。このプログラムを 2 日間にわたって午前、午後と両方の遊びもできるように配慮した。応募者数は 2 日間併せて 92 件あり（その内当日キャンセル 7 件）、88 家族、園参加が 4 件、また当日参加もあり、参加人数は大人と子どもを併せて優に 200 人を超えた。運動遊びと造形遊びのどちらか一方だけではなく、両方を限られた時間で体験したいという参加者が多かったため、スタートの遊びを予め指定するなどして実際の活動時には極端に人数の差が出ないように工夫した。しかし、最初に関わった遊びが面白いとそこに留まり、時間を費やしてしまうこともあった。参加者は午後よりも午前が倍以上多く、想定していた土曜日よりも日曜日の午前に最も多く集まった。

学生スタッフも 1・2 年併せて運動遊びに 14~17 名、造形遊びに 10~16 名程、常時都合の良い時間を選んで宛がうようにした。教員も含めるとスタッフは全員で 43 名であった。想像以上の参加者があり、本「遊び DAY」にスタッフも入れると、250 名程が参加するという大がかりなものになった。

#### 3-1 運動遊び

##### ○実施概要

日 時：2025 年 10 月 4 日（土）・5 日（日）

場 所：柴田学園大学短期大学部 体育館

対 象：3~5 歳児と保護者（同伴の 0~2 歳児）・幼稚園教諭・保育園保育士及び引率者

参加学生：保育科 1 年・2 年有志

形 式：自由選択型の運動遊びエリア構成

##### ○設定した運動遊びエリア（図 3 の運動遊び参照）

- 1) 動物サーキッド（鉄棒・平均台・マット・跳び箱・トンネル）※跳び箱は後で加えた。
- 2) ジャンプ島渡り・ケンケンパー（ケンステップ）
- 3) 風船キャッチ
- 4) ボール運び
- 5) ダンス（導入準備「だるまさんが踊った」他）・リズムジャンプ
- 6) 自由エリア（体操棒キャッチなど）

##### ○体育館の場の設定

各エリアを移動する動線の確保のため、三角コーンで区切った。床の滑り、器具の固定に配慮した。入口のホワイトボードに「体育館でのお約束」（幼児向け）を掲示し、入場時に 3 つの約束として口頭でも確認した。ホワイトボード裏面には、保護者・引率者用に「幼児期の運動あそびの意義」に関する資料を掲示した。保護者、引率者には、安全配慮の協力依頼と共に遊ぶことを勧めた。水分補給のための水筒置き場を設置した。

##### ○子どもの様子（図 3 の運動遊び参照）

活動中、子どもたちは汗ばむほど積極的に身体を動かし、挑戦・模倣・協力など多様な姿が見られた。特に跳び箱ジャンプ（ジャンプしてタンバリンをたたく）や鉄棒は、学生の援助を受けながら繰り返し挑戦する姿が多く見られた。また、区切りの三角コーンの間をジグザグに走ったり、体育館備え付けのバスケットゴールに向かってシュートしたりするなど、自ら遊びを発見して遊ぶ姿も見られた。風船遊びやトンネルは年齢の低い子どもにも取り組みやすく、安心して参加できる活動となった。

また、親子が一緒に身体を動かす姿も見られた。親子が横に並んで立ち、鈴付きの体操棒を床にトントンと突いた後、素早く相手の体操棒をキャッチしながら場所を入れ替わる遊びでは、保護者が子どもと同じテンポで動きを楽しみ、笑顔で参加する様子が印象的であった。こうした共有の場面は、運動遊びが親子のコミュニケーションを豊かにする機会となっていたことを示している。

### 3-2 造形遊び

○実施概要は運動遊びと同様である。会場はカフェテリアを使用し、中庭に自由に移動できるようにした。またカフェテリアの会場には、ジョイントマットを敷いて休める場を設置したが、学生の発案でそこには絵本も置かれた。子どもの要求に応じて、絵本の読み聞かせができるなど、自由に活動のできる場が準備された（図3の造形遊び参照）。

○設定した造形活動は、学生も授業で実施済みの造形遊びの内容「つないで つないで」である。

- ・指導（蝦名）：紙の丸め方とつなぎ方を説明
- ・準備物：古紙（A4～新聞紙大）、テープ、紙を丸めた棒を用意
- ・ファシリテーター（学生有志）：親子の活動を見守る。

○参加者と学生の様子（図4の造形遊び参照）

保護者と一緒には子どもは紙を丸めて棒を作り、それを思い思いにつないでいった。そこに学生がサポートをして寄り添い、順調に進められた。テーブルの上で棒を繋げて簡単な形が色々と作られ、保護者も手伝ったり、また自分の好きなものを作ったりした。それを中庭にセットする子どももいた。中庭では植物を愛でたり、自由に学生が作った動物に触れたり、設置された形の中をくぐり抜けたりして楽しむ子どもの様子も見られた。想定外なことに、写実的な動物だと、怖がる幼児がいることもわかった。

尚、「遊び DAY」という言葉から、「造形遊び」という言葉を使用したが、厳密に言うと、この「造形遊び」は小学校の図画工作科の表現内容の一つである。従って、正確には幼児に対する言葉としては同等ではなく、小学校の児童とはやはり内容的にも質的にもその違いが大きい。筆者はその点から小学校の造形遊びとは区別し、本報告では以降、「造形活動(造形的な遊び)」という言葉を使用したいと思う。



（図4）参加者と学生の活動の様子

### 3-3 アンケートの結果

アンケートでは以下の質問をし、学生に対しても同様に行った。

① 今日の「遊びDAY」はどうでしたか？（1～5（大満足）まで番号に○を付けて下さい）

その理由：

② 印象に残った遊びは何ですか？

③ その他（ご要望、やってほしい遊びなど）

#### 3-3-1 保護者・引率者間のアンケートの結果

回答数は76名。満足度を、不満＝1から大満足＝5の5段階、5点満点で評価してもらった。満足度の平均は4.75点で、普通＝3よりは非常に高い平均であった。理由の記述について、主な肯定的意見としては、「子どもが楽しそうだった」「普段できない遊びができた」「学生が優しくかかわってくれた」「自由に選べる環境が良かった」などが挙げられていた。一方、改善を要する点としては、「最初の説明が長い」「風船の空気入れが準備してあればよかった」「もっとハンカチ落としなど全員で関わる遊びもがあればよい」「マイク・メガホンも使ったほうがよい」などがあつた。

#### 3-3-2 学生アンケートの結果

回答数は29名で、学生の満足度もほとんどが4と5を占めた。多い理由をまとめると「子どもの個性・発達差への理解」「保護者との関わりの経験」「援助の難しさと工夫の必要性」「実践を通じた自信の獲得」に関する内容であった。

## 4 運動遊びと造形遊びの成果と課題

### 4-1 運動遊び

「遊びDAY」は、幼児にとっては市街地に立地している短期大学の体育館という広い場所を利用し、幼児の様々な運動遊びを経験させたい、本学の2年という短期間の学びの中で、学生が主体的に子どもと触れ合う機会を経験させたいという思いから、短期間に計画実施に至った。そのため次の点への視点が準備不足であったと考えている。まずは、事前の各担当の動き・役割確認の不足である。当日は、短期本学の職員に多くのことをサポートしていただいたが、配慮不足の面も露呈し運営面の改善点の共有が必要である。保護者・参加者のアンケートからは、自己選択の個々の遊びのみならず、子どもが関わる集団遊びの要望もあつた。体育館でのオリエンテーション導入では、準備運動としてダンスやリズムステップ、じゃんけんを使った遊びを一斉に行った。幼児の発達段階を考慮し、午前・午後で区切られた活動時間の中に、子ども同士が関わる遊びをさらに組み入れることは遊びを自由に選択・展開する時間を削減することになるため、一考が必要である。また、外国人の保護者の参加もあり、英語での説明や乳児などの休憩場所へのさらなる配慮のあり方も課題となって見えてきた。

今後の検討事項として、課題としてあげられた説明時間の短縮や体育館での動線の改善、マイク・メガホンの活用、外国人家庭への配慮や、全員で関わる遊びの導入希望をどのように組み入れるか、プログラムの改善などが見込まれるだろう。このような詳細な条件がさらに整ったとき、年間を通じた継続的な開催や地域連携イベントとしての発展が見えてくるのかもしれない。

### 4-2 造形遊び〔造形活動（造形的な遊び）〕

厳密な意味で保護者同伴の場合は、子どもと一緒に活動となることが多く、純粋に子どもだけの造形

活動を観察する機会は多くはなかった。丸棒を作って繋ぐという造形活動で、3～5歳児では、これまでの保育園や幼稚園での実践と同様の表現が見られた。棒を繋いで何かに見立てていくという形の作り方が多かった。中には学生と一緒に空間を区切るような活動も5歳児には見られたが、その中で特筆すべきは、ある4歳の女児である。細い棒ではなく、太い棒を与えると、それを差し込んで2メートルを超える長い棒を作り、その棒を持ってカフェテリアの入口の方に行こうとした時、偶然、その棒が斜めにその入口にぴったりと嵌ってしまったのである。その時の女児の反応が興味深かった。対角線のように嵌ったので、見ていた筆者も驚いたが、それをすぐ外そうとするのではなく、そのままその対角線状に嵌った形を非常に興味深そうに見つめていたのである。そして、盛んに傍にいた学生や保護者にそれを見るように注意喚起をし喜んでいた（図4 造形遊びの右下図）。

これは今回の「遊び DAY」で、初めて女子が一人で空間に働きかけたケースだったと言える。自分で自ら造形空間を創り出すことはできないにしても、そうした形と空間に注目する4歳児の感性に驚いた。尚、保護者もアンケートに最も印象に残った子どもの活動としてそのことに触れ、「一本の斜めの棒」と記してあった。

#### 4-3 「場所の空間」の関わりについて

「場所の空間」の関わり方については、運動遊びが行われた体育館では広い空間を6つのコーナーに区切って、それぞれの運動遊びができるように活動場所が工夫されていた。広い体育館をそのまま使用させるのではなく、予め子どもと保護者が活動しやすい適当な広さが、経験のある教師の判断で設定されていたのである。一方、造形遊びでは広いカフェテリアでテーブルごとにご家族が位置し、その上や周囲の床で造形活動が行われた。「子どもの体全体を働かせること」が、小学校の運動遊びと造形遊びには共通して重視されているが、そこには必ずと周囲の場所や空間との関わり方には違いがある。運動遊びでは大人も子どもも用具を使い一定のルールを守って、安全に気をつけながら自ら体を動かして遊ぶのに対し、造形活動においては、材料を使って新たな形を自由に創り出す（創造）点に重きが置かれる。共通して体全体を動かす活動ではあるが、その異なる最終目的によって、体の動かし方や周囲との関わりは当然のことながら異なってくる。単純化して言うならば、運動遊びでは「体を動かす運動（動中静）」に、造形遊びでは「つくり出す活動（静中動）」に主眼があり、改めてそうした参加者の周囲との関わり方が確認された。

今回、造形活動（造形的な遊び）では、一人の女子に注目した。運動遊びでも印象に残る男子（4歳児）がいた。その男子は、予め場所を区切る目的で並べられたコーンを場所の仕切りとしてではなく、そこをジグザグに走って遊び出したのである。ここでも教師が想像していなかった遊びの行為が見られた。これらの遊びの行為は、まさに自由な環境の中で、子ども自身が新たに発見した遊びである。ここに今回の「遊び DAY」の意義を見出すこともできよう。

## 5 おわりに—短期大学部で実施した「遊び DAY」の成果と今後の課題

今回の「遊び DAY」を実施した成果としては、以下である。

- ① 想像を超える親子の参加があった。子どもを持つ保護者にとってこのようなワークショップの需要が非常にあったことがわかる。
- ② 子どもたちがよく楽しみ、参加者の保護者のほとんどが満足して、またの機会を要望された。
- ③ 日頃の授業や教育実習では得られない機会として、親子の姿を間近に見る機会を与えられたこと

は学生にとっても望ましいことであった。

- ④ 初めての企画であったが、教員の協力もあって、多くの方々を迎え入れることができた。ハードとしての建物や中庭、カフェテリアの施設が役立てられた。また、このような大がかりなワークショップを実施するための収容力、受容力、対応力が、本学の学生にも教員にも備わっていることがわかった。

上記の子どもや保護者の要望にさらに応えるためには、今後具体的にどのような実践方法や実施形態が考えられるのか。無理のない範囲で継続できる方法が望ましいと想定されるが、それは今後の課題である。

## 謝辞

実施するにあたって、ご許可いただきました島内学長先生、特段のご協力をいただきました佐々木美子先生、岡本由美子先生を初め、本学の先生方や事務職員の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。そして「遊び DAY」にご参加くださった子どもたちやご家族の皆様、スタッフとして参加してくれた学生の皆さんに心から感謝いたします。

付記：本実践報告は、令和4～7年度科研基盤研究(C)「子供の空間把握に関する研究—環境と造形空間に焦点を当てて—」課題番号22K02564の研究成果の一部である。